

やっと、認めてくれたんだなあ。でも…

県特別支援学校長会会長(県立岡山西支援学校長)

平 賀 和 治



「ひいらつが せえんせ」
新採用で小学校5年生の担任となったが、その中に、特別支援学級から私のクラスに交流教育で来ていたA君がいた。そのA君が数ヶ月後に初めて名前を呼んでくれた。認めてもらえたんだと思い、とてもうれしかった。

朝の会や給食時間、図工や音楽の授業の時に、担任の先生と一緒に教室にやって来ては、ニコニコしながら静かに座っていたA君。新採用で、自分のクラスの子どもたちにもまだ十分な指導ができない私は、A君に対して、A君のための指導をすることができず、付き添いの担任の先生に任せっきりの状態であった。大学の講義で、特別支援教育(当時は特殊教育)について学んだり、岡山盲学校で教育実習の経験をしたりしたが、知的障害のある子との関わりはA君が初めてであった。

現在、小・中学校の教員免許状を取得するためには、特別支援学校で二日間以上、社会福祉施設で五日間以上実施される「介護等体験」という制度があり、全ての学生が特別支援教育を直に体験する機会がある。これから教育に携わろうとする人たちにとっては、とても大切な体験だと思う。

特別支援教育についてや発達障害・障害特性といったことについては、書物やインターネットで調べれば詳しく説明されており、知識としては得ることができる。しかし、実際に子どもたちに接してみると、「なぜ耳をふさいで立ち止まってしまったのか?」「なぜ急に大きな声を出したのか?」等々、その子の特性や立場に立って考えなければ、なかなか解決に至る支援を見いだすことはできない。昨年度から初めて特別支援学校に勤務しているが、子どもたちと接し、また、先生たちの指導・支援の様子を見てみると、書物だけでは分からない生の「特別支援教育」を感じる。体験することの意味は大きい。

さて現在、毎朝、校門で子どもたちを出迎えたり、各教室へ行ったりして、一人一人の子どもたちの名前を呼びながら挨拶をしているのだが、先日、中学部のB君が初めて自分から「こうちようせんせ。おはようございます。おじいちゃん。」と言ってきた。

何ヶ月もかかったが、やっと認めてくれたんだなと思う、うれしかった。でも少し、複雑・・・。